

短歌

河分武士
澤 絢子
宮本照男
選

特選

初孫^{ういまご}の央太郎^あ生るガザでなく

ウクライナでもなきこの国に

日夏町 石原不二子

(評)

最愛の初孫の誕生を家族で祝う情景が浮かぶ。ふと心を過ぎるのは、もしもこの子が戦闘の続くガザやウクライナに生まれたのであったならどんなに不安と慄きに晒されることだろうか。平和なこの国に生まれて本当に良かったと、戦を怖れ、平和を願う心の内がよく解かる。

特選

公園のばら繚乱のシンフォニー
指揮者のごとく噴水ゆれて

中藪町 山川美江

(評)

公園には大輪小輪数多のばらが、色鮮やかに咲き誇っている。その多彩な繚乱をシンフォニーと、独自の着眼をしたところが秀逸。指揮者を噴水とし一首の核にしたのめ的確。花の王と言われるばらの繚乱とシンフォニーが、詩情豊かで読者を魅了する。

特選

病む足を擦り鎮めて雪掻くも
掬いよろけるもうすぐ卒寿

芹橋二丁目 古池陽彦

(評)

冬場の雪掻きの実情を上句に淡々と詠みながら卒寿の結句に深刻な生活が思いやられる。危うい力仕事の動きに応じた啓示のような動詞表現がより現実味を増してくる。社会性も含んだ一首となった。巧みな構成である。



入選 絵筆とりお喋り笑うひと時を

色紙に描き思いふくらむ

日夏町 津野幹子

(評) 高齢者の集う「お喋りの会」は日頃の思いを語りあい、発散する絶好の機会となつてゐる。そこで感じた印象を絵筆を持つて色紙に描くという。その色紙を見ればまた話題が一段と膨らむ、憩いの様子が的確に詠われている。

入選 並び立つ老杉のシルエツト染め上げて

茜ひろがる産土の杜

犬上郡多賀町 木村正子

(評) 並び立つ老杉のシルエツトから周囲の景観を鮮やかに浮かばせ、茜ひろがる産土の杜へと焦点を絞り込んでいる。この構想により産土の杜の荘厳さと同時に、守り神への深い愛着を醸す一首となり効を奏している。

入選 廃校の校門に新学期児童ら見えず

侘したたずまい桜吹雪舞う

長浜市 小谷敏夫

(評) 作者が育つたのか、先生として通つたのだろうか、懐かしの校舎が、今では少子化の為に廃校となつてしまった。新学期になつても児童の姿の见えない校舎には桜吹雪が舞うという。寂しさが漂う。

入選 バスに乗り昔の僕に会いたくて

峠越え行く芹谷分校

東近江市 藤本修

(評) 二句、三句の「昔の僕に会いたくて」の力みのない素直な表現が下の句へ昇華させ結句の芹谷分校の存在が明らかになってくる。人生の後半生の感傷的なころの動きを伝えてくる。

入選 老いてなおときめき覚ゆ悩みたる

短歌の一首の立ち上がる時

日夏町 寺村享子

(評) 作歌する時には、題材・構想・表現・リズム等に苦勞し悩むことが多い。しかしその辛さや苦勞を乗り越え一首が完成すると、心を満たすときめきが湧く。作者の意欲や真摯な姿勢がしみじみと詠まれており、作歌する人の共感を呼び励ましともなる貴重な一首。

入選 夫送る柩に入れるコートのポケットに

残るチケット二枚

本庄町 田口洋子

(評) 今までの想いが一気に湧き上がってくる見送りの場のコートのポケットに思いがけないチケットが残っていた。どんな想いでそのチケットを持っていたのだろうか：夢、現を交差するかのような結句の存在が重い。

佳作　をちこちに桜咲けども一番は
君とはじめて見たこの桜

東近江市　坂口靖子

佳作　また震^{ふる}う指先しかと宥^{なだ}めつつ
娘の幸願い雛飾り終^おう

古沢町　野洲康雄

佳作　羽根の艶ふかめて鳩は巣づくりの
身丈をこゆる枯草はこぶ

西今町　松本トシ子

佳作　今日咲くか明日は咲くかと見上げおり
年追うごとに桜を待てり

犬上郡豊郷町　森　典子

佳作　袖通す母縫ひ呉れし半纏に
とうに齢を過ぎたる今日も

米原市　奥村和子



《総評》

今年の市民文芸は、例年になく作品が減少しました。思い当たるのは新たに出品料が制定された為かと思われます。出品された方には手続きに手数をお掛けいたしました。

出品者二十五名全員の方が、出品規定に定められた三首ずつを応募され、文芸を愛する熱意に安堵いたしました。

作品は多岐に渡り、心に響くものがあり、嬉しく拝見いたしました。

短歌は、みじか歌ですが古来より続く伝統ある文芸です。今後皆様さんの短歌が読む人に感動を与え、心に沁みる宝石のような作品に出会えるように期待しております。

河 分 武 士

第六十一回彦根市民文芸作品に接する機会を賜り、その偉大な歩みに感動と賞讃が込み上げて参りました。

短歌の応募者数は減少していますが、練り上げられた格調高い作品ばかりで、何度も熟読し選歌させていただきました。内容的には、家族や地域の絆、四季の景観や趣味等が多く詠まれていました。さらに今年は生き方や社会への念も多く、生活に深く根付いていることを実感しました。今後市民の皆様のご健詠により彦根市民文芸が、心の財宝となり発展しますようお祈り申し上げます。

澤 絢 子

今回も印象に残る作品を数多く拝読でき選歌は尊い時間でした。一方、苦渋の決断を迫られる味わい深い歌もありました。寄せられた短歌にこもる人生の重なりと熱量に感動を覚えました。病棟や介護の施設にありながらも生活のリアリテイを詠んだ短歌も見受けられました。繰り返される日常の目の前に景や今ここで起きている現象を「二期一会」の新鮮な気持ちの感覚で向き合うことが理想かと思えます。いつもより多彩な印象を受け好感を持ちました。

宮 本 照 男

選者吟

琉球王朝の末裔という井伊夫人

ひこにゃんの街彦根の母なり

河 分 武 士

朝影の季の舞台で共演す

八重桜の紅・花水木の白

澤 絢 子

濠べりの櫻あじさい入れ替わり

急ぎし季節ときの花の生涯

宮 本 照 男